

**第6回釧路市まちづくり基本構想策定市民委員会
議事要旨**

- 1 日 時 平成29年11月27日（月）
午後3時00分～午後5時00分
- 2 場 所 釧路市役所 本庁舎2階 第3委員会室
- 3 出席者
- (1) 委 員：浅野委員、伊藤委員、井上委員、大嶋委員、大野委員、
金子委員、川前委員、川村委員、小磯委員、柴崎委員、
夏堀委員、西村委員、長谷川委員、畑委員、原田委員、
檜森委員、松尾委員
(五十音順)
- (2) 釧路市：蝦名市長、名塚副市長、岡本総合政策部長、
平山総合政策部次長、太田基本構想主幹、大物専門員、
平間主査、沼尻協力員

4 内 容

- (1) 開会
(2) 会議成立確認
(3) 市長挨拶
(4) 委員長挨拶
(5) 議事
- ①釧路市まちづくり基本構想シンポジウムの開催結果について
資料1に基づき、事務局より説明。

・意見交換

(○は委員の発言、◎は委員長の発言、●は事務局の発言、以下同じ)

- ◎ 先般開催されたシンポジウムの来場者アンケートの結果について説明
がなされたが、これもパブリックコメントの一環という性格もある。
域内連関という概念をどこまで市民の方々に理解していただけるのか
は、この委員会だけではなく、市の担当者にも不安がある部分であったと
思う。シンポジウムで説明をし、そのアンケートから域内連関の重要性を
かなり多くの方が受け止めておられることは見えたと思う。

自由記述を読むと、市民の方々は、どのように域内連関を具体的に地域で進めるのかに関心があると思っている。それが、まちづくり基本構想を進めるうえで求められているポテンシャルという見方もできる。市長からシンポジウムの総括、手応えなどあればお願いしたい。

- （市長） 例えば、地球規模の環境問題では、これまでのやり方では解決策が見つからない課題に対し、バックキャストイングの手法が用いられてきている。今までの行政計画はフォアキャストイング、つまり、過去の伸び率や実績を延長して計画を策定し進めていた。しかし、これからは、このような将来を目指すという理念、考え方を示し、それを理解していただく事が重要だと考えている。目指す将来を実現する方法は様々あるが、試行錯誤して進めていくのがまちづくりである。

また、アンケートには「わかりやすさ」という意見があったが、どのように理念や考え方を伝えていくのかを考えていきたい。個別計画の方が具体的で分かりやすい部分があるが、これからのまちづくりではビジョンも重要だと考えており、シンポジウムでは域内連関について、しっかりとお話しさせていただいた。

- ◎ 昨日まで韓国の釜山で開催された世界の地域政策に関する国際会議に出席しており、世界の研究者を集めたディスカッションが行われた。今、特にEUの地域政策は、人口減少、低成長のなかで、いかに地域の活性化を目指していくかについて、新しいチャレンジが始まっている。産業クラスターやR&D（研究開発）が失敗したともいわれており、その反省のもとで、現在進められている政策がスマート・スペシャリゼーションである。スマートという言葉は、日本でも色々なところで言われているが、日本語では「見える化」であり、全体を把握、理解したうえで戦略を考えていく。スペシャリゼーションとは、結局、強みを生かす、既存の縦割りのなかで横断した考え方で自分たちの強みや資源を生かしていく。これは世界の地域政策で基調になっているが、具体の解についてはこれからの応用問題である。このような理念の中で、何を目指していくのかについて、釜山で色々ディスカッションが行われたが、難しさと重要なことが2つある。一つは、これまでの政策は縦割りであり、それをいかにまとめて結びつけていくかという点である。そこに政策マンの知恵が必要。もう一つは、低成長の時代は外部の資源をいかに獲得するかではなく、いかに地域にある資源に価値を付けていくかである。この2つをしっかりと組み合わせながら政策を進めて行くことが重要。そういう議論に参画しながら、これは、まさに域内

連関だと感じた。釧路市は新たにまちづくりの基本構想で域内連関というコンセプトを位置付けているが、これは、世界の最先端で、これまでの地域政策の失敗を乗り越えてやろうとしている、地域内部の力を再発見し、それをつなげながら力にしていくという内発的な取り組みに近いコンセプトである。

是非、自信や誇りを持って進めていただきたいと思います。具体的な取り組みの検討が問題だが、これは行政だけがやるものではない。行政は良い意味でまちの色々な関係者を巻き込んで、盛り上げていく仕掛けづくりが重要である。そのような取り組みが、まちづくり基本構想で展開することができれば、地域の活性化における世界的な政策モデルになりうる可能性を持っていると思っている。

②釧路市まちづくり基本構想（構想編）について
資料２－１、資料３に基づき、事務局より説明。

③釧路市まちづくり基本構想（計画編）について
資料２－２、資料３、資料４に基づき、事務局より説明。

・意見交換

○ 第４章 都市構造・都市基盤に阿寒や音別地域について記載を追加したとの説明がなされたが、阿寒や音別について、コンパクトなまちづくりは推進されていないと認識している。これは同じ箇所に記載することで混同される懸念はないのか。

●（基本構想主幹） ご意見はコンパクトなまちづくりと阿寒、音別のまちづくりが混同して解りにくいとのこと指摘かと思う。庁内で、「都市的地域に準じる地域」である阿寒、音別地区の位置付けについて議論を行った結果、「都市的地域」については、施策展開の（１）コンパクトなまちづくりとして記載し、阿寒、音別地区は（２）都市的地域に準じる地域に記載させていただいた。

○ 明確に区別した方が良いように感じる。

構想編は市民と共有してする理念になっていることはイメージできるが、計画編は、釧路市が実施主体という認識で記載しているのか。

- （基本構想主幹） そのような意図はなく、まちづくり基本構想は釧路市のまちづくりの指針として一つの計画として策定している。
- （市長） 今までの総合計画は、構想部分が法律により議決案件になっていた。今回のまちづくり基本構想は、まちづくり基本条例を根拠に策定しており、これを「釧路市まち・ひと・しごと創生総合戦略」のように市長が決めるのかについて議会とも相談したが、やはりこれまで同様に構想部分は市議会で議決することになった。計画編は、今までも議決案件ではないので、分けて提示しているが、実際の内容については一体でまちづくり基本構想である。
- 私の理解では、構想編は理念を言葉で語ったもので、計画編では各論に入っていく、その内容が市役所の各部署の個別の計画に反映されていくと思う。その計画が出てこない、シンポジウムのアンケートにあったように具体的な取り組みの内容が見えないという指摘につながるのではないかと。個別の計画に反映していくことで、市民にも具体的に理解され、様々な取り組みに参加できる体制に結びつけることが重要だと感じる。

全体の感想だが、構想編では概況や分析から入り、「4 目指すべきまちづくり」が記載されている構成である。その前までの分量が多く、一般の方が読むことをやめてしまう懸念がある。「目指すべきまちづくり」は、大きく記載して、その後の「都市空間利用の基本方向」などは別ページでも良いと思う。まちづくりのスローガンである「目指すべきまちづくり」や「まちづくり基本方針」が重要なことが構成から感じられれば、より基本構想の理解が進むのではないかと感じた。
- ◎ 市民委員会で議論したまちづくりへの思いは「目指すべきまちづくり」に凝縮されているが、全体の一部で整理されてしまうことには、私も違和感がある。今後のまちづくり基本構想の発信方法の課題でもある。パンフレットなどで機械的に目次の1から5までを同じボリュームで記載して紹介したときに、市民にメッセージが届くのかという指摘である。
- （基本構想主幹） 前回の総合計画では目指すべき都市像を表紙に載せるなどしている。今後、概要版を作成するなかで考えていきたい。

- 予算の関係もあると思うが、メディアでも中高生新聞や学生向けの新聞がある。釧路地域で暮らす学生が大人になっても地域で暮らしてくれるように、まちづくり基本構想も中高生や学生向けのわかりやすい表現で紹介されたものがあると浸透しやすいと思う。
- （基本構想主幹） 昨年の市民アンケートでは中学生アンケートを実施したが、その時にも、なるべく中学生に分かりやすい表現・図を工夫した経過があるので考えていきたい。
- このまちづくり基本構想は必要な時に全て揃っているべきで、分量が多くなるのは致し方ないと思う。全部を通して読むことは無いが、必要な時に文面が漏れなく記載されていることも市が作成する観点では重要だ。一方で、トップページに大きく記載するなどして伝えることも大事だ。市も用意されていると思うが、どうしても文章が多く、情報量も多い。もっと見やすくできる方法があるのかもしれない。
概要版の作成は専門業者に委託しているのか。
- （基本構想主幹） 前回の委員会やシンポジウムで配布した概要版等は職員が作成している。
- 例えば、最初の分かりやすく伝える部分だけは、デザインのプロの力も借りてもいいのではないか。地元にはデザイン関係の事業者が多くいる。域内連関の一つの例として、市長の思いを分かりやすく伝えるためにはどうしたら良いかを、地元の事業者を集めて相談してみたら、もっとおもしろい伝え方が見つかるかもしれない。
全体版は辞書みたいなものとしても、更に分かりやすくするという観点から、そういう取り組みを入れていくと説得力も増すと思うので是非検討いただきたい。
- ◎ すでに、まちづくり基本構想をどのように進めていくかの議論に移りつつあるので、これ以降は、これまでの委員会を振り返りながら、今後の基本構想について意見を頂きたい。
基本構想のような長期プランというのは、作ったあとに管理しないことが一番良くない。基本構想をみんなが共有して、みんなで取り組んでいく気運が高まると、そこに色々なエネルギーが生まれてくる。
シンポジウムのアンケートでも域内連関は良い理念だという感想が

あった一方で、それを具体的にどう進めていくのかという問い掛けもあった。しかし、「市役所、何かやってください」といった問い掛けは良くない。域内連関の実現に向けて、どういう取り組みがあるのかも、最終の委員会にあたって意見をいただきたい。

- 域内連関の伝え方には議論があると思う。ただ発信するだけだと、あまり見てもらえないと思っている。デザインも大事だが、今後のまちづくりのなかで、行政や民間企業、個人、団体の人たちがつながっていくことに、それぞれメリットがあることを理解していくために、市民の人たちと協力する形の伝え方が重要ではないか。

そのなかで、誰が伝えるかは、すごく大事だと感じる。ここにいる委員の方々が身近な人たちに伝えていくのが良いと思っている。例えば、市役所の実施している出前講座で職員ではなく策定委員が話すことも一つのアイデアだと思う。あるいは、先ほども話があったが、中学生は小学生、高校生は中学生にと、ストーリーテラーのように伝えたい人たちに一番伝えることができる人たちが伝えるようにする。そして、アクションプランまで考えてもらうことを、学校であれば授業に取り入れてもらう。公立大のサークルや先生と共同で研究していくなども考えられるのではないか。行政の職員が伝える対象は、経営者や市民団体のリーダーであり、伝わりやすいと思うが、まちづくりに意欲がある人以外は、身近な人に言われないと響かないと思う。この域内連関の理念を伝えることができる人が伝えて、アクションプランまで自分達で考えていくアイデアである。

- 構想編は、釧路市が目指す理念として、それなりにまとまったと感じている。資料の序盤に統計データが記載されているのは、この委員会の進め方として我々に解りやすいような形にしたものだと理解している。実際に、市民に伝える資料では統計データを参考資料として記載するかは考える余地があると思う。

計画編に関しては、非常にまとまっていると思うが、現状分析からの提案や提言が多い気がする。これから10年先のビジョンを考えていくのであれば、10年先にこの地域がどのようなかたちになっているのかを踏まえたうえで、今何をすべきかといった視点があると良い。おそらく、10年後に再びまちづくりの基本計画を策定するときには時代が大きく変わっている可能性がある。非常に社会の変化のサイクルが早いなかで、10年間の計画を作るのは大変だが、10年後をイメージした視

点も盛り込まれると良かった。しかし、基本構想はあくまでもビジョンなので、各部各課に浸透しながら、戦略や戦術の議論が展開されると思うので、様々な見識からの意見を聞きながら進めていただきたい。

また、まちづくり基本構想を市民がどこまで意識しているのかという点では、浸透がまだまだ足りない。今は情報化社会なので、情報に触れる機会が多い一方で、情報が溢れているので目に留まらない。市の広報戦略に関して、ただでさえ行政に感心の薄い方々が、従来通りの広報戦略で、本当に見てくれるのか疑問である。おそらく、広報物は地元の事業者で入札などによって決めていると思うが、デザインなどを請け負う事業者の立場になると、行政の仕事なので、このような形でやれば良いという意識があると思う。一方で、行政もあまり角が立たない形で進めるので、お互い無難なところで落ち着く。先程申し上げたように、今、色々な情報があることで無難な物は見てもらえないことが伝わりづらさにつながっている。やはり、どのようにして関心や興味を持ってもらうかに、行政も軸足を置いていくべきだと思う。構想編が市民の方々と共有できれば良いし、ましてや、行政の方々が構想編に書いてある内容を覚えるくらい浸透に力をいれていただきたい。

- ◎ 市役所内部で基本構想の理念をきちんと共有して、域内連関の議論が溢れるぐらいの雰囲気作りが重要だという意見は大事だ。総合計画は、色々な自治体が策定しているが、本当に政策の柱にしているかと言えば、実はその組織の一部しか認識していない状況になりがちなので、内部努力を続けて欲しい。

- このシンポジウムのアンケート結果から、釧路が良いまちだとか、釧路の良いところがあるからそれを売り出そうなど、前向きな意見があることを確認できたと思う。

域内連関を考えた時に、具体例があると域内連関を実践してみたいと思うのではないか。言葉は難しくイメージがしづらいかもしれないが、市内にはすでに実践者が大勢いて、少しの気付きがあると前に波及していく。そして、「自分にもできるかも」と思う方が増えることで、次に誰かとながると何かを生み出せるという広がり結びつくと思う。

この構想編の考え方が、人を大事にするところに集約されて位置付けられていることが、まちづくり基本構想の良いところだと思っている。一方で、市民に伝える時に分厚い計画は読み込む人が少ないので、伝えたい部分を決めたうえで、お知らせしていく。そして、その中で実践例

があると市民がより理解しやすいと感じる。

- シンポジウムの参加者は市内で色々なジャンルで中心的に活動している方だと思う。その方々の感想は重要ではあるが、一般の市民の方々が、どのように理解するかが重要ではないか。

域内連関は素敵な考え方だと思うが、これを釧路市で考えるとイメージが難しくなる。もっと小さな地域を考えると、すでに実践していると思われることが多い。すべてのジャンルではないが、例えば、教育分野のコミュニティスクールは学校と地域の域内連関であるし、盆踊り一つを例にしても、町内会や地域のお店、学校など様々な方が関わっている。それが今、希薄になってしまっていることが問題だが、このように小さな地域での域内連関が市民の方々にも理解しやすいと思う。分かりやすい小さな取り組みが段々と地域の中に広がって、市民の意識が高まることでイベントなどに参加する気持ちも高まっていくのではないか。

- 域内循環や域内連関という言葉は、この委員会に参加するまであまり意識していなかった。あまりにも情報があるので、やはり興味や関心がないと自分で見つけて取り入れることには至らない。

色々な立場、世代の人に分かりやすい形で提供することが大事である。情報は言葉や表情で伝えるのが一番効果的だと思う。例えば、PTAでは研修があるが、母親が分かるような簡単な域内連関の冊子があれば、そこに分かりやすい情報を提供していくなど、色々なところに広げていければ良いと思う。そうすることで、母親が子どもの小さい頃から家庭の中で話題にすることが、一番底辺で、一番将来のあることだと感じる。できる人ができるところで少しずつみんなに広げていければ良いと思う。これから職場の若い職員や子どもたちに、釧路の良いところ、そして域内連関という言葉を広げていきたい。

- 計画編の各分野に「関連する個別計画」が掲載してある。今は市役所の計画が記載されているが、例えば、この基本構想を推進していくなかで、新たな市の政策が展開されたことを追加して記載していく。あるいは地域の団体や町内会など様々な方の取り組みで当てはまりそうなことが記載されていくと、こんなことも域内連関に関係しているとイメージができる。

もうひとつ、シンポジウムのアンケートで自由記述のなかの、「地域の連関を一流とするのか、慣れ合いとするのか」という意見は、域内連関

に関する重要な投げかけだと思っている。やはり、ただ関連していれば良いのではなく、しっかりとそれぞれが切磋琢磨できるようにひとりひとりが向き合っ、最終的に、その域内の物を選ぶと、それが一番幸せだったというところを目指した取り組みにすべきだ。

- 新しいつながりが域内関連なのか、何か、すでにある取り組みも域内関連になると感じる。この部分に違いはあるのか。
- ◎ 域内関連は概念であり、これまでも取り組まれている事例はあると思う。しかし、それを域内関連として認識したうえで、地域活性化につながるという意識を持って取り組むかどうかでは大きな違いがある。だから、意識を持ってもらう点で、今ある域内関連を確認していくことも重要だ。それから、今まで関連、つながりが無かったところを結ぶ、新しい域内関連をつくり出していくことも重要。だから、どちらかという議論ではなく、この新しい釧路の基本構想の中では、そういう取り組みを全部含めて域内関連として進めていくメッセージと理解すれば良いのではないか。
- (市長) 人材育成について、総合教育会議で申し上げたことを紹介させていただきたい。首長が参加する市の総合教育会議は、義務教育の小学校、中学校、そして市立の北陽高校だけをベースにして議論を進めているのではない。教育の現場は、幼児教育から始まって保育所や学校、塾、短大、専門学校も含めて関連している。そして、それらが公立であろうと、私立であろうと関係なく、地域の教育力と捉えて教育大綱を定め進めていこうと考えている。これも地域内の関連力だと考えている。
- ◎ ここまでの議論からは、すでに実践例が地域にあることが分かった。これから取り組む部分もあるが、域内関連という言葉で、どんな実践例があるのかを幅広く集めてみることもわかりやすさにつながるかもしれない。この理念を分かりやすくしていくことも、まちづくり基本構想の取り組みになる。
- 最終的に域内関連を釧路の文化にしていくことが必要だ。なるべく域内のモノを使いながら、地域が続いてきたという認識を生まなければならない。そのためには、域内関連の具体例を挙げながら理解していくことが必要だと思うので、様々な事例を集めることも重要ではないか。例

えば、「私の域内連関」を投稿してもらって、取り上げるのも一つの方法だと思う。域内連関にはこのような取り組みもあるということが広がっていく場があると理解しやすいと思う。

また、続けていくためには実践したことの評価が必要。評価されると、もっと取り組んでいこうという気持ちになるので、やはり評価は大事だ。一つのアイデアではあるが、例えば、広報くしろのコラムで実践例を取り上げることや、既存の取り組みで該当するものに市が表彰すると、みんな楽しく取り組める気がする。我々が行う出前授業では、小学校で酪農の授業を実施し、地元の食材を使った給食をみんなで食べる活動をしている。そこに認証制度のような形で、釧路市では域内連関に取り組んでおり、この活動は認証されていますと言えると、受け手も釧路の取り組みが分かり、活動する側も格が上がるメリットが生まれるのでないか。

これらはアイデアだが、敷居を下げて市から積極的に働きかけると広がっていくと思う。

- 構想編にある域内連関のイメージでは、皆さんのご意見から、これまでの取り組みを基に、具体例を示していくことが理解しやすいと感じた。

資料には23年後の2040年の人口は13万8千人を目指しているとの記載がある。このまちが13万人になることをイメージすることは難しいが、実際に13万8千人まで人口が減少したときに、今のサービスが維持できる想定で私たちは生きていけばいいのか。あるいは、病院や学校の数が少なくなるなど、色々なサービスや施設が失われていくことも考えなくてはならないのか。当然人口が減少すると、市の収入も少なくなると思う。そのうえで、無いものねだりではなくて、人口が減少した20数年後に対して、どのように責任を持って発言したらいいのかという思いがある。

そういったなかで、この域内連関は、釧路という各団体の顔と名前がまだ一致しやすいスケールのまちだからこそ、まだ頑張れる要素が多くあると思う。まず、市役所の職員が、どのセクションにいても自分の言葉で語れて、市民の人に声を掛けて、関係作りができるようにしていただきたいと感じる。ただ、それだけでは賄いきれないと思うので、業界の団体の方々や学校現場、あるいは町内会の方々が、少しずつネットワークを確かなものにしていくことも重要だと思う。

アンケートには、札幌から移って来た方々が、釧路のイメージが分からないという意見があったが、モデルとして何処のまちを目指している

のか、その方にもモデルになるまちが提示されていれば、少しイメージが持てる気がする。マイナスのイメージでよく語られるのは夕張だが、一市民がこの釧路に住み続けていくために四半世紀後にどのようなイメージを持ちながら、この10年間に取り組むのかという観点から政策を練っていただきたいと思う。

- 今日、議論している域内連関は、あまり難しく考えなくても普段から割と実践されていると思う。市の水産課が取り組んでいる「くしろプライド釧魚」がまさにそうであると思っている。当初は釧路地域ブランド推進委員会でサケ、ししゃものブランド化に特化したのが、それを「くしろプライド釧魚」という名前で、特定の魚種に特化しないで漁業者と水産加工業者、卸売、飲食まで含めたグループで活動している。何月はどういう魚がおいしいのかなど魚の旬が分かるような形で進めている。いずれはどこで食べられるのか、どこで買えるのかまで発信していきたい。まさに色々な部分で知らず知らずのうちに普段から実践していると思うので、それをもう一步進めることが重要だと思う。

計画編については、予算の関係や様々な事情から、出来る事、出来そうな事が記載されており、もう一步踏み込んで10年後をこうしたいという冒険的なものは記載されていないと感じる。マニフェスト的な部分でお約束できる事を網羅している印象があるが、出来なくても目標を立てて実現に向けて取り組んでいくことも大事だと感じた。

- 福祉の世界でも他業種とのつながりが大事だと思っていたので、委員会を通じて様々な人と意見交換できたことは有意義だった。

域内連関については、社会福祉協議会でコミュニティワークとして、地域内の人付き合いや人と人をつなぐことに取り組んでいるので、理解しやすかった。例えば、域内連関のイメージのなかでも子どもを育てる、学校の地域、企業も含めた色々な関係者で取り組むことが記載されていたことも理解のしやすさにつながったと思っている。これから、それぞれの分野でどのように取り組んでいくかが重要だと思うが、やはり、人づくりと人と人をつなぐコーディネーターの存在が非常に大事な要素だと思っている。人づくりについては、福祉の分野では講座を開いたり、担い手づくりだったりを繰り返し行っている。最近の傾向でいくと、具体的にこのようなことを実現するために担い手が必要だとPRすることで、明確な目的を持って参加していただけると感じている。

また、教育委員会で何か仕組みをつくって、システムチックに進める

ことに加えて、若い頃から地域を愛するとか、地域活動を自然体で受け止められるような活動が大事だと思う。地域からの学校に対する取り組みも含めて、子ども達に対するまちづくりや郷土愛の醸成が重要。市内の小学校の土曜活動で、子ども町内会として、子どもたちが自ら地域の人を招き、地域活動と同じような取り組みを行った。そのために、子どもたちが地域に出向いて町内会長に地域活動の大変さや現状について取材している。このように、地域のことを子どものときから体験学習する企画や活動が今の時代大切だと感じており、それぞれが人づくりという点で頑張っていければ素晴らしいと思っている。

- 市の様々な計画は庁舎や支所のどこかには置かれていると思うが、市民の目に届きにくく、手に取って読んでもらうことにつながらない。そういう意味でも、より多くの市民に見てもらえる環境を市で作ってもらいたい。

これからまちづくり基本構想を実践していくためには、市からのアプローチや問い掛け、資料の提供は刺激になると思う。しかし、市だけに任せるわけにはいかない。やはり行政が取り組むだけではなく、市民が積極的に関心を持ってまちづくりの考え方を理解し、釧路のまちの活性化に取り組むことも重要。また、構想編にもあるように、市民との協働による取り組みによって、一層、まちづくりは推進できると思っている。

- 幼稚園の業界で重要な言葉が連携である。子どもを育てる一連の時間のなかで、幼稚園で預かる期間は限られている。先程、市長から教育大綱の話があったが、子どもを産んで、育て、その人が大人になって自分で稼げるようになるまで、すべての関係者が連携していくことが重要で、バラバラではいけない。このように連携が重要な考え方である点から域内連関と同じだと思っていた。つながりの中で自分のポジションで何ができるのか。そして、次へつなぐために何ができるか、この2つを考えることが重要だと常々考えており、この点も域内連関と同じだと感じた。顔の見える、声の掛けやすい関係から小さいつながりを作っていくことが、大きなつながりに結びついて、最終的に次の世代を作っていくことになると考えている。

今回委員会に出席して、役所は何部何課と縦に分かれて物事を考えていると思っていたが、横断的に考えている部分もあると感じた。市長が言っていたように、今後、色々なことを変えていったり、取り入れていったりする柔軟な考え方で進めたい。

- 域内連関に、「それぞれの強みや地域資源を生かしながら、付加価値の創造や地域課題の解決に向けて行動する考え方」と書いてあるが、この考え方を大事にしてほしい。例えば、地元の物は地元の物で買いたいという考えは素晴らしいと思うが、ただ単に互いの大変なところを補うのではなく、経済の部分に関しても、連携することで新しい付加価値や課題解決のための前向きな方策が出るような議論であるべきだ。戦略・戦術レベルでも市民や有識者を交えた会議も開催されると思うが、そこを行政として馴れ合いの後ろ向きの議論にしてしまうと、結局、何も決まらないと思う。様々な人の意見を聞きながら作ることは、大変だとは思いますが、適切な人選をしていただいて、新しいことをやっている方々も入れていくと、新しい発想が出てくると思う。そういった点では、従来の行政的な発想を変えていただきたい。

- これから、進行管理や具体の施策が示されていく。その途中経過で、例えば行政が何をやった、市民が何をやった、市民と行政が連携して何をやったかが見えることで一層まちづくりが進んでいく。

域内連関は聞き慣れない言葉なので、小学校の高学年にも伝わるような内容にしなければ、広く市民には浸透できないと思う。子どもたちが考える域内連関はどんな姿なのかを提案してもらうことも考えられる。

- ◎ 今回、まちづくり基本構想で示された、域内連関、つまり、地域内のみんながつながりを深めながらまちづくりをしていこうというコンセプトについて議論がなされたことは、この釧路の皆さんが培ってきた基盤あってこそだと感じている。私が、約20年前に釧路に来て、最初に感じたのは、地域のつながりのあまりの無さである。稼ぐ力はすごいが、稼いだお金をこの地域で一切使わない、投資もしない。これは良くないというメッセージを出し続け、時間がかかったものの、新しいまちの政策に域内連関として位置付けられたのは個人的にもうれしく思う。

私が域内循環の考え方を最初に述べた時に、かなりの人が自給自足的な論理と批判したが、私は全く違くと反論した。我慢して自分達の地域のものを買うということではなく、もし自分達が欲しい物が地域になれば、そういう要求は生産者に伝えていく。いい意味での緊張関係が重要だというメッセージを出していった。

それが大事なコンセプトとして認識され、まちづくり基本構想に取り入れられるようになった時代背景には、人口減少があると考えられる。

人口が増加して、経済が成長していた時代は色々考えなくても、自然に生活ができたわけだが、やはり人が減ると経済の規模も縮小していく。それにつれて市の税収が減るため、行政の力が落ちる。そこで、どのように生き抜いていくかを考えた時に、外へばかり目を向けていると、それは、やはり簡単なことではない。メーテルリンク作の童話「青い鳥」では、外の世界を探してみたが、結果的に振り返ってみたら大事な物は自分の家にあった。そういう思いで改めて地域を見つめ直す時代に、ひとりひとりが域内連関について考えていただき、その中から様々な事例を具体的に見せていく。そういう状況作りが、これからの大事な取り組みなので、まちづくり基本構想の推進のための政策として考えていただきたい。これは予算のかかる話ではなく、釧路に関わっている民間企業であり、市民であり、色々な団体であり、市役所以外の人達も、どのような取り組みが実践されてきたのか、それをどう展開していけば域内連関を深められるのかを、議論できるような盛り上がりを作り出してほしい。

5 その他

6 閉 会